

科目名	学年	番号	学籍番号	氏名
量子力学I 第8回	2			

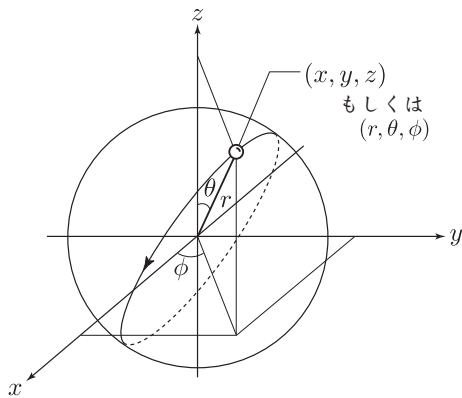
全問解答し、答え合わせ（自己採点）をして提出せよ。

授業時間外の学習時間： \_\_\_\_\_ 時間 \_\_\_\_\_ 分

[1] 「詳解 量子化学の基礎」の5章（54頁～66頁）を読みなさい。

[2] 半径  $r_1$  の球面上を運動する粒子を想定する。粒子の感じるポテンシャルエネルギーを次のように設定すれば、粒子は球面から飛び出すことなく運動する。

$$U(x, y, z) = \begin{cases} 0 & \text{ただし } \boxed{\text{(a)}} = r_1^2 \text{ を満たす点} \\ \infty & \text{ただし } \boxed{\text{(a) 再出}} = r_1^2 \text{ 以外の点} \end{cases} \quad (1)$$



Schrödinger 方程式は、次のように書き表される。

$$-\frac{\hbar^2}{2m} \left( \frac{\partial^2 Y}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 Y}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 Y}{\partial z^2} \right) + U(x, y, z)Y = EY \quad (2)$$

ただし、波動関数は  $Y$  で表した。図に示したように、3次元での極座標では動径  $r$ 、 $\boxed{\text{(b)}}$  角  $\theta$ 、 $\boxed{\text{(c)}}$  角  $\phi$  を用いて、任意の点の座標を  $(r, \theta, \phi)$  で表す。直交座標系  $(x, y, z)$  から極座標系  $(r, \theta, \phi)$  への変換関係を上式に代入すると次式が得られる（計算略）。

$$-\frac{\hbar^2}{2I} \left[ \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left( \sin \theta \frac{\partial Y}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2 Y}{\partial \phi^2} \right] + U(r, \phi, \theta)Y(\phi, \theta) = EY(\phi, \theta) \quad (3)$$

$$U(r, \phi, \theta) = \begin{cases} 0 & \text{ただし } r = \boxed{\text{(d)}} \\ \infty & \text{ただし } r \neq \boxed{\text{(d) 再出}} \end{cases} \quad (4)$$

ただし、 $I := mr_1^2$  は  $\boxed{\text{(e)}}$  である。直交座標系ではなく、極座標系を用いる理由は、Schrödinger 方程式を書き下すと変数が、 $(x, y, z) \rightarrow (\theta, \phi)$  と1つ  $\boxed{\text{(f) 減る or 増える}}$  からである。

[3] ここで、 $\boxed{\text{(g)}}$  の手法を使う。つまり、次式のように波動関数  $Y$  が  $\phi$  だけを変数として含む関数  $\Phi(\phi)$  と  $\theta$  だけを変数として含む関数  $\Theta(\theta)$  の積で書き表せると仮定する。

$$Y = \boxed{\text{(h)}} \quad (5)$$

(5) 式を (3) 式に代入して方程式を整理すると次式が得られる。導出は問題 [8] とした。

$$\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \sin^2 \theta = -\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} \quad (6)$$

この式は、左辺は  $\theta$  だけの関数であり、右辺は  $\phi$  だけの関数である。これがつねに成立するためには、左辺も右辺も「定数」でなければならない。

$$\boxed{\text{(i) (6) 式の左辺を書け}} = \text{定数} \quad (7)$$

$$-\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = \text{定数} \quad (8)$$

[4] 簡単そうな (8) 式から始める。(8) 式の定数を  $m^2$  とおくと、(8) 式は、

$$-\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = m^2 \quad (9)$$

と書ける。定数を  $m$  ではなく  $m^2$  で与える理由はすぐにわかる。上式の両辺に  $-\Phi$  をかけると次式が得られる。

$$\boxed{\text{(j)}} \quad (10)$$

これは  $\boxed{\text{(k)}}$  型ポテンシャルのときの Schrödinger 方程式とまったく同じ形である。こ

れより,  $\Phi(\phi)$  は次式で表されることがわかる。

$$\Phi_m = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{im\phi} \quad (11)$$

ただし,  $m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots$

$m = 0, \pm 1, \pm 2$  に限って  $\Phi_m$  の具体的な表式について書き出して置く。

$$\Phi_0 = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \quad (12)$$

$$\Phi_{\pm 1} = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{\pm i\phi} \quad (13)$$

$$\Phi_{\pm 2} = \boxed{\phantom{(\ell)}} \quad (14)$$

[5] 難しそうな (7) 式についても同様に書き下す。

(8) 式 =  $m^2$  とおいたので, 当然だが (7) 式も  $m^2$  に等しいとおく。

$$\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \sin^2 \theta = m^2 \quad (15)$$

この微分方程式の解法は少し(ではなく, かなり)長くなるから, ここでは結果だけを示す。

$$\Theta_{\ell, m}(\theta) = A \sin^{|m|} \theta \frac{d^{|m|}}{(d \cos \theta)^{|m|}} P_{\ell}(\cos \theta) \quad (16)$$

ただし,

$$P_{\ell}(\cos \theta) = \boxed{\text{(m) テキストを見て書け}} \quad (17)$$

$$m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots, \pm \ell \quad (18)$$

$A$  はただの規格化定数で,

$$A = \sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell - |m|)!}{(\ell + |m|)!}} \quad (19)$$

と表される。また, エネルギー準位は,

$$E = \ell(\ell + 1) \frac{\hbar^2}{2I} \quad \text{ただし, } \ell = 0, 1, 2, \dots \quad (20)$$

で表される。ここで,  $P_{\ell}(\cos \theta)$  は  $\boxed{\text{(n)}}$  とよばれる特殊関数である。  $\sin^{|m|} \theta$  は  $\sin \theta$  の  $|m|$  乗を表し,  $d^{|m|}/(d \cos \theta)^{|m|}$  は  $\cos \theta$  で  $|m|$  回微分することを意味する。

$\Theta_{\ell, m}(\theta)$  に  $m$  は絶対値  $|m|$  として入っていることに注意しよう。つまり,  $\Theta_{\ell, m}(\theta)$  は  $m = 1$  の場合と  $m = -1$  の場合とで, まったく  $\boxed{\text{(o) 同じ or 異なる}}$  形になる。 $\Phi_m(\phi)$  は  $m = 1$  と  $m = -1$  の場合で異なる形をとるので, 最終的に得られる波動関数  $Y$  としては  $m = 1$  と  $m = -1$  で  $\boxed{\text{(p) 同じ or 異なる}}$  形をとる。

[6] ここまでで (天下一的ではあるが) 3次元空間を回転運動する粒子の波動関数  $Y$  が,

$$\begin{aligned} Y &= \Theta_{\ell, m}(\theta) \cdot \Phi_m(\phi) \\ &= \sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell - |m|)!}{(\ell + |m|)!}} \sin^{|m|} \theta \frac{d^{|m|}}{(d \cos \theta)^{|m|}} P_{\ell}(\cos \theta) \\ &\quad \times \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{im\phi} \quad (21) \end{aligned}$$

$$\text{ただし, } P_{\ell}(\cos \theta) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{(d \cos \theta)^{\ell}} (\cos^2 \theta - 1)^{\ell} \quad (22)$$

$$m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots, \pm \ell, \quad \ell = 0, 1, 2, \dots \quad (23)$$

であることがわかった。この関数  $Y$  は, 一般に  $\boxed{\text{(q)}}$  とよばれる。これには, とびとびの値しか許されない  $\boxed{\text{(r)}}$  が  $m$  と  $\ell$  の 2 個含まれている。 $m$  と  $\ell$  は好き勝手な値をとれるわけではなく,  $m = 0, \pm 1, \pm 2, \dots, \pm \ell$  と  $m$  の絶対値の上限が  $\ell$  によって規定されている点に注意が必要である。

[7] 一般に, ルジャンドルの多項式  $P_{\ell}(x)$  は,

$$P_{\ell}(x) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{dx^{\ell}} (x^2 - 1)^{\ell}$$

で表され, これの陪関数としてルジャンドルの陪多項式  $P_{\ell}(x)^m$  が次式で与えられる。

$$P_{\ell}^m(x) = (1 - x^2)^{m/2} \frac{d^m}{dx^m} P_{\ell}(x)$$

ただし,  $m \geq 0$  とする。ここで,  $x = \cos \theta$  を代入すると, ルジャンドルの多項式が,

$$P_{\ell}(\cos \theta) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{(d \cos \theta)^{\ell}} (\cos^2 \theta - 1)^{\ell}$$

となるのがわかるか。... は, 一目瞭然なので, つぎに行く。やはり,  $x = \cos \theta$  を代入するとルジャンドルの陪多項式が,

$$P_{\ell}^m(\cos \theta) = \underbrace{\left( \frac{1 - \cos^2 \theta}{\sin^2 \theta} \right)^{m/2}}_{=\sin^m \theta} \frac{d^m}{(d \cos \theta)^m} P_{\ell}(\cos \theta)$$

となるのがわかるか。... も, 一目瞭然か。

[8] 3次元空間で回転運動する粒子（ただし半径は固定されている）の波動方程式を極座標で表現すると次式を得る。

$$-\frac{\hbar^2}{2I} \left[ \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left( \sin \theta \frac{\partial Y}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2 Y}{\partial \phi^2} \right] = EY(\phi, \theta) \quad (3)$$

これに波動関数  $Y = \Phi(\phi) \cdot \Theta(\theta)$  を代入して整理すると次式のようにまとまることを示せ。

$$\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \sin^2 \theta = -\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\phi^2}$$

[9] 次に示した関数に  $\ell = 1, m = -1$  を代入し,  $\Theta_{\ell, m}$  の具体的な表式を得なさい。

$$\Theta_{\ell, m}(\theta) = \sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell - |m|)!}{(\ell + |m|)!}} \sin^{|m|} \theta \frac{d^{|m|}}{(d \cos \theta)^{|m|}} P_{\ell}(\cos \theta)$$

ただし,  $P_{\ell}(\cos \theta)$  は  $P_{\ell}(\cos \theta) = \frac{1}{2^{\ell} \ell!} \frac{d^{\ell}}{(d \cos \theta)^{\ell}} (\cos^2 \theta - 1)^{\ell}$  である。

[10] 問題 [9] と同様に計算し，下表を完成させよ（ $P_\ell^m(\cos \theta)$  には  $\sin \theta$  が含まれる場合もある）。なお，計算はノートで行え。

$\ell$	$m$	$P_\ell^m(x)$ $= \frac{1}{2^\ell \ell!} \frac{d^\ell}{dx^\ell} (x^2 - 1)^\ell$	$P_\ell^m(x)$ $= (1 - x^2)^{m/2} \frac{d^m}{dx^m} P_\ell(x)$	$P_\ell^m(\cos \theta)$	$\sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell -  m )!}{(\ell +  m )!}}$	$\Theta_{\ell,m}(\theta)$ $= \sqrt{\frac{2\ell + 1}{2} \frac{(\ell -  m )!}{(\ell +  m )!}} P_\ell^m(\cos \theta)$
0	0					
	0					
1	0					
	1					
2	0					
	1					
	2					

# 解答

[1] なし

[2] (a) :  $x^2 + y^2 + z^2$  (b) : 天頂 (c) : 方位 (d) :  $r_1$  (e) : 慣性モーメント (f) : 減る

[3] (g) : 変数分離 (h) :  $\Phi(\phi) \cdot \Theta(\theta)$  (i) :  $\frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \sin^2 \theta$

[4] (j) :  $\frac{d^2 \Phi}{d\phi^2} = -m^2 \Phi$  (k) : 環状井戸 (l) :  $\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{\pm 2i\phi}$

[5] (m) :  $\frac{1}{2^\ell \ell!} \frac{d^\ell}{(d \cos \theta)^\ell} (\cos^2 \theta - 1)^\ell$  (n) : Legendre (ルジャンドル) の多項式 (o) : 同じ (p) : 異なる

[6] (q) : 球面調和関数 (r) : 量子数

[7] なし

[8] 与式に  $Y = \Theta_{\ell,m}(\theta) \cdot \Phi_m(\phi)$  を代入して, 素直に式変形する。

$$-\frac{\hbar^2}{2I} \left[ \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left( \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta} (\Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)) \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \phi^2} (\Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)) \right] = E \cdot \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)$$

ここで,  $\frac{\partial \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)}{\partial \theta} = \Phi(\phi) \frac{d\Theta(\theta)}{d\theta}$  と  $\frac{\partial^2 \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)}{\partial \phi^2} = \Theta(\theta) \frac{d^2 \Phi(\phi)}{d\phi^2}$  に注意すれば, 以降の変形がわかるだろう。

$$-\frac{\hbar^2}{2I} \left[ \frac{\Phi(\phi)}{\sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta(\theta)}{d\theta} \right) + \frac{\Theta(\theta)}{\sin^2 \theta} \frac{d^2 \Phi(\phi)}{d\phi^2} \right] = E \cdot \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)$$

$$\frac{\Phi(\phi)}{\sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta(\theta)}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi) = -\frac{\Theta(\theta)}{\sin^2 \theta} \frac{d^2 \Phi(\phi)}{d\phi^2} \quad \text{両辺に } -\frac{2I}{\hbar^2} \text{ をかけて, 移項した}$$

$$\frac{\sin \theta}{\Theta(\theta)} \frac{d}{d\theta} \left( \sin \theta \frac{d\Theta(\theta)}{d\theta} \right) + \frac{2IE}{\hbar^2} \sin^2 \theta = -\frac{1}{\Phi(\phi)} \frac{d^2 \Phi(\phi)}{d\phi^2} \quad \text{両辺に } \frac{\sin^2 \theta}{\Theta(\theta) \cdot \Phi(\phi)} \text{ をかけた}$$

[9] まず,  $P_1(\cos \theta)$  を求める。


$$\begin{aligned} P_1(\cos \theta) &= \frac{1}{2^1 \cdot 1!} \times \overbrace{\frac{d}{d \cos \theta} (\cos^2 \theta - 1)}^* \\ &= \frac{1}{2} \times 2 \cos \theta = \cos \theta \end{aligned}$$

\*の微分は,  $\cos \theta \rightarrow x$  とおけば,  $(x^2 - 1)' = 2x$  という簡単な微分をしているだけなのがわかる。次に,  $\Theta_{1,-1}$  を求める。

$$\begin{aligned} \Theta_{1,-1} &= \sqrt{\frac{2 \cdot 1 + 1}{2} \cdot \frac{(1 - |-1|)!}{(1 + |-1|)!}} \sin^{|-1|} \theta \frac{d^{|-1|}}{(d \cos \theta)^{|-1|}} \cdot \cos \theta \\ &= \sqrt{\frac{3}{2} \cdot \frac{0!}{2!}} \sin \theta \frac{d}{d \cos \theta} \cdot \cos \theta \\ &= \frac{\sqrt{3}}{2} \sin \theta \end{aligned}$$

ここで,  $0! = 1$  を用いた。

今日の講義でわからないことがあれば, お伝えください。また, 講義に対する要望があればお書きください。感想などでも結構です。もちろん, 成績等には一切関係ありません。

 記述欄

$\ell$	$m$	$P_\ell(x)$	$F_\ell^m(x)$	$F_\ell^m(\cos\theta)$	$\sqrt{\frac{2\ell+1}{2} \frac{(\ell- m )!}{(\ell+ m )!}}$	$\Theta_{\ell,m}(\theta) = \sqrt{\frac{2\ell+1}{2} \frac{(\ell- m )!}{(\ell+ m )!}} P_\ell^m(\cos\theta)$
0	0	1	1	1	$\sqrt{\frac{1}{2}}$	$\sqrt{\frac{1}{2}}$
	1	$x$	$x$	$\cos\theta$	$\sqrt{\frac{3}{2}}$	$\sqrt{\frac{3}{2}} \cos\theta$
1	0	$x$	$\sqrt{1-x^2}$	$\sin\theta$	$\frac{\sqrt{3}}{2}$	$\frac{\sqrt{3}}{2} \sin\theta$
	1	$\frac{3x^2-1}{2}$	$\frac{3x^2-1}{2}$	$\frac{3 \cos^2\theta - 1}{2}$	$\sqrt{\frac{5}{2}}$	$\sqrt{\frac{5}{8}} (3 \cos^2\theta - 1)$
2	0	$\frac{3x^2-1}{2}$	$3x\sqrt{1-x^2}$	$3 \cos\theta \sin\theta$	$\sqrt{\frac{5}{12}}$	$\frac{\sqrt{15}}{2} \sin\theta \cos\theta$
	1	$\frac{3x^2-1}{2}$	$3(1-x^2)$	$3 \sin^2\theta$	$\frac{\sqrt{5}}{4\sqrt{3}}$	$\frac{\sqrt{15}}{4} \sin^2\theta$